

[執筆スケジュールと原稿の提出先]

1. 原稿を 2022 年 2 月末までに作成し、Word ファイルを前田宛てにメールで送付する (PDF ファイルも添付する)。ファイル名は執筆者氏名とする (例：前田満.doc、前田満.pdf)。原稿提出先：m-maeda@dpc.agu.ac.jp

[執筆要領]

1. 原稿は Word をもちいて日本語で作成する。
2. 原稿分量は、初回提出の段階では、1 ページあたり 35 文字×32 行で、13 ページ以内とする。
3. 字体は、本文、注、参考文献のいずれにおいても、和文を MS 明朝、英文を Century とし、10.5 ポイントの文字を使用して下さい。
4. 原稿の 1 ページ目は、1 行目は空行、2 行目に論文タイトル (中央揃え)、3 行目にさらに空行を 1 行入れ、4 行目に執筆者名 (中央揃え)、5 行目に同じく中央揃えで所属 (大学名のみ) を、その後さらに空行を 1 行入れ、7 行目から本文を書き始める。
5. 執筆には日本語を用い、句読点はテン (、)、マル (。)を使用する (ただし、刊行時にはカンマ、ピリオドに変更されます)。
6. 文体は「～だ」「～である」調で統一し、用字用語は、原則的に「常用漢字」を用いる。それ以外のもので特に読みにくいものにはルビをつける。漢字表記かひらがな表記か迷うものについては、原則ひらがな使用する (例：「したがって」「すなわち」「ほか」「など」「(この) ほう」「わかる」「いえる」)。ただし、「例えば」は漢字を用いる。数字は原則アラビア数字使用する (例：「1 つ」「2 人」「3～5 通り」「6 番目」「1990 年代」)。漢字熟語の専門用語については、原則漢数字使用する (例：「一人称」「二重目的語」「三項動詞」)。次の送りがなについては、「表す」「行う」「断る」で統一する。
7. セクションおよびサブセクション番号について：下記の要領で番号をつけ、それぞれに見出しタイトルをつける。セクション、サブセクションの前には、空行を 1 行入れる。

- 1. セクション
 - 1.1. サブセクション
 - 1.1.1. サブセクション
 - ...
 - 1.2. サブセクション
 - ...
- 2. セクション
- ...

- 8. 本文について：各段落の出だしのインデントは、**全角 1 字分**とする。
- 9. 例文について：例文は各論文ごとに通し番号 (アラビア数字) とし、前後に半角括弧を付け、全角 2 字分のインデントをとる ((1)、(2)、(3) ...)。1 つの例番号に複数の例をあげる場合は、アルファベット小文字 (ピリオド付) で分けし、番号とアルファベットの間半角 1 字分のスペースを入れる (a. b. c. ...)。なお、本文と例文の間には空行を 1 行入れる。
- 10. 引用文献の年号について：括弧付きで表示する (注も同様)。ページ数は、年号の後にコロンと半角スペースを入れ、その後に入れる (例：Chomsky (1965: 22))。
- 11. 注について：**脚注**とし、上付きのアラビア数字を用いて論文ごとに通し番号とする。謝辞がある場合は、トップページの論文タイトルの最後に上付きの * をつけ、当該ページに脚注として入れる。なお、本文中の脚注番号は、カンマやマルなどの外に入れる (例：「であるが、¹」「である。²」)。
- 12. 図表について：できるだけデジタル・データ化を行って Word 上に取り込む。ただし、デジタル化がむずかしい場合は、プリントした原稿にコピーを貼付する。図表には番号 (図 1、表 2 など) を各図表の下につける。図には必ず**キャプションを付ける**。
- 13. 参考文献について：英文書、英文論文等は English Linguistics の書式に準ずる。和書、和文論文等も EL の書式を日本語に当てはめた形式をとる。次例を参照。

参考文献

- 早瀬尚子 (2009) 「懸垂分詞構文を動機づける「内」の視点」『「内」と「外」の言語学』, 坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明 (編), 55-97, 開拓社, 東京.
- McCawley, James (1998) *The Syntactic Phenomena of English*, 2nd ed., University of Chicago Press, Chicago. [洋書単著の場合]
- McClosky, James (2000) “Quantifier Floating and WH-Movement in an Irish English,” *Linguistic Inquiry* 31(1), 57-84. [ジャーナル掲載論文の場合。ジャーナルに巻番号と号番号がある場合、号番号もカッコ内に入れる。]
- Moltmann, Friederike (1989) “Nominal and Clausal Event Predicates,” *CLS* 25, 300-314. [学会プロシーディングス掲載論文の場合]
- 中島平三 (2000) 「構文文法を考える」『英語青年』第 147 巻 12 号, 738-741 751 ; 第 148 号 1 巻, 34-37 ; 第 148 号 2 巻, 116-121. [和雑誌掲載論文の場合]
- Newmeyer, Frederick J. (2003a) “What Can the Field of Linguistics Tell Us about the Origins of Language?” *Language Evolution*, ed. by Morten Christiansen and Simon Kirby, 58-76, Oxford University Press, Oxford. [論集所収論文の場合]
- Newmeyer, Frederick J. (2003b) “Grammar is Grammar and Usage is Usage,” *Language* 79(4), 682-707. [同一著者が続く場合、著者名は破線などで省略しない]
- 大津由紀雄・池内正幸・今西典子・水光雅則 (2002) 『言語研究入門—生成文法を学ぶ人のために—』研究社, 東京. [和書共著の場合]
- Perlmutter, David M. and Paul Postal (1984) “The 1-Advancement Exclusiveness Law,” *Studies in Relational Grammar* 2, ed. by David M. Perlmutter and Carol Rosen, 81-125, University of Chicago Press, Chicago. [論集所収共著論文の場合]
- Pesetsky, David (1982) *Paths and Categories*, Doctoral dissertation, MIT. [未公刊博士論文の場合]